

歴史の臨在性について

——岸田吟香「臺灣信報」を読む——

山 田 潤 治

出発点1 客観的呼称と数字

Charles Dickens の作品 *Hard Times* には、事実を極端に重視する人物、Thomas Gradgrind が登場する。彼は *Hard Times* 冒頭にあらわれ、印象的な言葉を吐いている。

Now, what I want is, Facts. Teach these boys and girls nothing but Facts. Facts alone are wanted in life. Plant nothing else, and root out every thing else.

(Charles Dickens, *Hard Times*, Chapter I The One Thing Needful)

彼は、自ら事実を重んじると宣言した上で、少年少女の教育において事実がなによりも大切であると考え、事実に反する要素は必要なく排除すべきであるという教育観の持ち主として描かれている。唯一絶対の神への信仰にかわってヒューマンイズムが現れ、ヒューマンイズムに事実が取って代わろうとする 19 世紀の思想状況を戯画的に体現する人物であるといえる。God が、Human beings、そして、Facts と、Dickens の記述において、《事実》が、fact でも、facts でもなく、《Facts》と複数大文字で表記されていることが、このあたりの経緯を象徴的に示しているといつてよいだろう。この、Thomas Gradgrind が、サーカスの馬の調教師の娘である Sissy Jupe に質問をする場面がある。

"Girl number twenty," said Mr. Gradgrind, squarely pointing with his square forefinger, "I don't know that girl. Who is that girl?"

"Sissy Jupe, sir," explained number twenty, blushing, standing up, and courtesying.

"Sissy is not a name," said Mr. Gradgrind. "Don't call yourself Sissy. Call yourself Cecilia."

"It's father as calls me Sissy, sir," returned the young girl in a trembling voice, and with another courtesy.

"Then he has no business to do it," said Mr. Gradgrind. "Tell him he mustn't. Cecilia Jupe. Let me see. What is your father?"

"He belongs to the horse-riding, if you please, sir."

Mr. Gradgrind frowned, and waved off the objectionable calling with his hand.

"We don't want to know any thing about that, here. You mustn't tell us about that, here. Your father breaks horses, don't he?"

"If you please, sir, when they can get any to break, they do break horses in the ring, sir."

You mustn't tell us about the ring, here. Very well, then. Describe your father as a horsebreaker. He doctors sick horses, I dare say?"

"Oh yes, sir."

"Very well, then. He is a veterinary surgeon, a farrier and horsebreaker. Give me your definition of a horse."

(*Hard Times*, Chapter II Murdering the Innocents)

Thomas Gradgrind は、Sissy に "Girl number twenty" (女子 20 番) と呼びかけ、その名をたずねるが、自分の名前を "Sissy Jupe" とその愛称で答えた Sissy に対して、"Sissy is not a name. Don't call yourself Sissy." と咎めている。"It's father as calls me Sissy, sir" と答える Sissy に対し、Thomas Gradgrind は、"Then he has no business to do it." と言い捨てている。Sissy というひとりの人間に対して、そのアイデンティティを示す Fact は、

Cecilia という戸籍名（あるいはこの学校に登録された氏名）であり、また、学校で便宜上振られた数字、girl number twenty のみであるというわけだが、Thomas Gradgrind が主張する Facts は、Thomas Gradgrind が考えるように、真に客観的で中立的な《事実》足り得るのだろうか。

父親の職業についても、Sissy——もちろんここでは Cecilia ではなく、作品中、登場人物の人称として用いられているこの呼称を使おう——は、サーカスの曲馬師である自分の父親を、" He belongs to the horse-riding." とこの上なく明確に回答している。「サーカスの」という前置詞句はないものの、Sissy にとってサーカス一座は父親の職場であり、自分の住まいでもあり、彼女の世界の大部分であるから、世間一般に蔑視されるであろうサーカス一座を隠そうという作為は彼女の発言の背後にはない。一方、Thomas Gradgrind は、Sissy の回答 the horse-riding の語の意味をシフトさせようと試みる。なぜならば、彼にとって、「サーカス」という《下賤の空間》は、彼の考える《事実》に反する存在であり、彼の《事実》を信奉するがゆえに、《真実としての事実》をずらし、隠蔽するのである。

Your father breaks horses, don't he? (おまえの父は、馬を飼いならしているのだね) と反問する Thomas Gradgrind に対し、無邪気にサーカスであることが伝わっていないのだと理解した Sissy は、when they can get any to break, they do break horses in the ring, sir. (飼いならす馬が来たら、サーカスリングで飼いならすのです。) と in the ring という前置詞句を付け加えている。これに対し、Thomas Gradgrind は、サーカスリングについては言及してはならん、と Sissy を叱った上で、Sissy の父親は、a veterinary surgeon, a farrier and horsebreaker なのだ《定義》されることになる。曲馬師は、《事実》の名の下に、獣医、蹄鉄工、飼馬師とその定義を代えられているが、horse-riding (in the ring) という明瞭な定義は、3つの名詞によって、一見、丁寧になったように見えて、その実、馬が病気の時に診断してやり、蹄鉄を打ち、餌をやるといふ、サーカス一座における曲馬師の仕事の一部を分解して説明しただけで、サーカスの曲馬師にとってもっとも象徴的な仕事、つまり曲馬師を換喩的に言い換えれば真っ先に言及するべき、観客の前で馬に芸をさせる、という属性が無視されてしまっている。辞書的な定義

を与えた、Thomas Gradgrind の事実とはいったいどのような性質をもつものなのであろうか、これが本論文の出発点であり問題意識であることをまずは述べておこう。

Sissy の名についても、固有名が言語学上、connotation によって成立している「空虚なシニフィアン」であるという保留がつくが、父親が自分の娘を、Sissy という愛称で呼び、それを自ら名乗る Sissy の子供らしさのなかには、父親と娘の関係とその物語が反映されていることは間違いない。たしかに、Cecilia Jupe という正式名や Girl number twenty は、戸籍に登録されている記号であったり、学校における整理番号であったりと、私たちが無防備に Facts だと認識してしまうものの一端を担っている。しかし、人間を整理番号で呼称することが人間疎外、人間性の否定につながる可能性を秘めていることは、アウシュビッツ収容所のユダヤ人に刻印された数字を想起するまでもない。《事実》優先を標榜して、主観的な表現を客観的な表現に置き換えることは、物語を殺すことであり——むろん、Dickens の意図はそこにあり、19 世紀の物語否定に対する強烈な批判が込められており、同時に、21 世紀にも有効な批判である——、芸術の存在する可能性を否定するものとなりかねない。

出発点 2 科学的＝客観的定義

続く場面での「馬」の定義についても興味深いやり取りが行われている。

…Give me your definition of a horse.

(Sissy Jupe thrown into the greatest alarm by this demand.)

"Girl number twenty unable to define a horse!" said Mr. Gradgrind, for the general behoof of all the little pitchers. "Girl number twenty possessed of no facts, in reference to one of the commonest of animals! Some boy's definition of a horse. Bitzer, yours." (Chapter II)

馬とはなにかと、馬の「定義」を求められて言いよどむ Sissy に対して、Thomas Gradgrind は、お気に入りの少年を指名し、馬の定義を答えさせる。

"Bitzer," said Thomas Gradgrind. "Your definition of a horse."

"Quadruped. Graminivorous. Forty teeth, namely twenty-four grinders, four eye-teeth, and twelve incisive. Sheds coat in the spring; in marshy countries, sheds hoofs, too. Hoofs hard, but requiring to be shod with iron. Age known by marks in mouth." Thus (and much more) Bitzer.

"Now girl number twenty," said Mr. Gradgrind. "You know what a horse is." (Chapter II)

「四足獣、草食性、40本の歯、内訳は24本の臼歯と4本の犬歯と12本の門歯、春に毛が抜け、湖沼地域では蹄も抜ける。蹄は硬いが蹄鉄を打つ必要がある。年齢は口内の斑痕で判明する」という科学的な定義は、馬と生活を共にしているであろう、Sissy にとっては、何らの意味をもたない。私たちが、普段の生活において食事を摂る際に、自分の口内の歯の本数を意識することがないのと同様、Sissy にとって、馬の臼歯の本数は、what a horse is の回答にはならないであろう。科学的＝客観的な定義が行われたところで、馬について《了解》されたとはいえないわけであるが、Thomas Gradgrind は、馬は the commonest animals であるといいながら、commonest である理由を語らない定義を Facts として認定している。

出発点3 統計と子をなくした母

また、別の場面にさらに興味深い対話がある。

"Statistics," said Louisa.

"Yes, Miss Louisa—they always remind me of stutters, and that's another of my mistakes—of accidents upon the sea. And I find (Mr.

M'Choakumchild said) that in a given time a hundred thousand persons went to sea on long voyages, and only five hundred of them were drowned or burned to death. What is the percentage? And I said, Miss;" here Sissy fairly sobbed as confessing with extreme contrition to her greatest error;"I said it was nothing."

"Nothing, Sissy?"

"Nothing, Miss—to the relations and friends of the people who were killed. I shall never learn," said Sissy. "And the worst of all is, that although my poor father wished me so much to learn, and although I am so anxious to learn because he wished me to, I am afraid I don't like it." (Chapter IX Sissy's Progress)

統計 (statistics) を吃音 (stutterings) と聞き間違えてしまうという Sissy の勘違いは象徴的だが、「あるとき、10万人の人が航海にでて、うち500人が溺死した。溺死者は何%か?」という統計の問いに対して、Sissy は、「it was nothing」と回答する。死んだ人たちの身内や友人にとっては nothing だ、と言い、自分はどうも勉強が好きではないと告白している。この Sissy の回答は、小林秀雄の議論を想起させる。子供に死なれた母親をめぐる議論であるが、ここでは紙面の都合上、省略する。

事実と歴史：ヴァレリー「海」と「泡沫」の隠喩から

Dickens が Thomas Gradgrind なる人物に仮託して批判の矛先を向けた《事実》偏重だが、日本で同様の問題意識が浮かび上がったのは、1938年(昭和13年)、河上徹太郎の論文「事実の世紀」によってである。

六

…ヴァレリーなどは、以前の「秩序」の時代に比して廿世紀をば「事實」の時代と屢々呼んでいる。…(中略)…

「事実」の時代とは何か？ 事実とは合理主義の最も堅實な結論から

生れたものに違ひないのだが、然しさてその世界から合理主義の足場を外して、事実許りで出来た虚構の世界を眺めると、そこに當然神祕主義的な匂がして来る。此の神祕性は、これからの世の中は何だか分からないといふ一般的な不可知論から来るやうにも見えるが、然しもつと正確にいへば、我々ヒューマニズムで育つた兒等の、純粋な事実の世界への恐怖感である。

ポール・ヴァレリーの「歴史」概念を受けて河上の論文は書かれている。《事實》が合理主義の結果であることを認めつつ、その客観性から、合理主義を差し引くと、「事実許りで出来た虚構の世界」で「神祕主義的な匂」がする、と河上は述べる。問題は、「純粋な事実の世界への恐怖感」ではないだろうか。ここで河上が述べている恐怖は、何に根ざすものなのであろうか。疑問を得る鍵は、昭和13年という時代背景にあるだろう。「事實の世紀」が掲載されたのは、改造社の文芸雑誌「文藝」昭和13年3月号である。前年昭和12年7月7日に、盧溝橋事件が発生、日華事變がはじまり約半年後のこの時期は、さまざまな雑誌がいわゆる「事變報道」によって埋め尽くされていった期間にあたる。文藝春秋、中央公論、改造、日本評論、キングなどの総合雑誌は、どの雑誌も、「現地報告」というタイトルのルポルターージュを増殖させ、国民の期待に応えようとさまざまな事變関連の特集記事を組んだ。紙面は事變報道一色で、書き手も評価の高い文学者たちいわゆるプロフェッショナルの書き手とは異なり、従軍兵士や陸軍報道担当者などに急速に偏っていき、また《事實》を伝えるルポルターージュが雑誌の売上げにつながっていった。まだ、日本本土は戦見舞われておらず、戦争は遠い大陸での出来事であり、雑誌の紙面にでぎやかに展開される「事実許りで出来た虚構の世界」が、不気味に広がっていたわけである。

事實で出来た虚構の世界がある一方で、長谷川巳之吉の第一書房から、「世界文豪讀本全集」全12巻が最後の「ヴァレリイ篇」の発刊により完結したのが、同年6月のことである。外の世界への国民の関心は、文学・文化という諸国民の精神への関心から、国際社会の生の《事實》への関心へと猛烈なスピードで移行していった。大衆の関心と結びついた《事實》叙述によって、

国際文化へのディレッタント的関心に基づく文学は放逐されていく。この経緯は、第2次世界大戦敗戦後に湧き上がった記録文学の猖獗状況¹⁾と非常に似ているのだが、本論文では、昭和13年の時代状況については詳述せず、河上の議論を追跡しておこう。

河上は、後年、『有愁日記』の中で、ヴァレリーの叙述を借りながら自らの歴史観を披瀝している。ヴァレリーが歴史的事実を軽蔑していると述べ、その論拠として、『邪念その他』*Mauvaises pensées et autres* (1942年)につけられた注である、*Ce qui me concernant* (私に関すること)の記述を引用する。

「事件は私には面白くない。」すると人はいふ、「何という興味津津たる時代だ、」と。

私は答へる。事件は事象の泡沫だ。しかるに、私に興味を感じさせるのは海なのだ。漁をするのも海中だし、航海するのも海上だし、潜るのも海中だ……。だが、泡沫では？……と。

事件は「効果」である。それらは感性の産物だ²⁾。… (河上徹太郎訳)

このいかにもヴァレリーらしい、海のメタファーを引きながら、河上は、海／泡沫という、全体／部分の二項対立によって、ジャーナリズムを批判する。

現代日本は激動する時代にある、といはれる。正にその通りだが、然しわがジャーナリズムは余りにその「泡沫」に眼を奪はれ過ぎてゐるのが私には物足りぬ。幽霊だ、幽霊だといつてみると、本当に幽霊が出て来る。私にはその方が恐い。必要なのは、激動する波浪の「泡沫」の彼方に空を見、その下に海の実体を感じることだ。因みにヴァレリーは地中海に生れ、「私の子供の頃には海の上にはまだ歴史が生きてゐた」(『地中海の感興』)と懐しんでゐることも思ひ併せるべきであらう³⁾。

ジャーナリズムは「今」「なにがおきているか」の出来事(事件)をリアルタイムで詳細に叙述するが、それは、「泡沫」に眼を奪われてすぎていて、

「空」そしてその下にある「海」を見失ってしまっているのだと河上は批判をしている。泡沫がメトニミーとなって浮かび上がらせる全体は幻影＝幽霊であり、泡沫ばかりを見ていると、存在するはずもない幽霊を喚起し、泡沫の彼方に広がる「空」そして「海」を見失ってしまうのだと。この河上の認識は、昭和13年の論考「事實の世紀」から根本において変わることはない。では、いったい、こうした泡沫＝《事實》を偏重するあまり、目の前に広がる「空」、見失うはずのない「空」と「海」＝歴史を見失ってしまうという喜劇はどこからはじまったのであろうか。

岸田吟香「臺灣信報」の叙述

敗戦後の戦争記録文学（昭和23年～）、日華事変下のルポルタージュ（昭和12年～）、と戦争の推移と戦場の悲惨に対する大衆の関心と並べると、やはり近代ジャーナリズムを歪めたのは戦争という《事實》の叙述ということになるが、その起源をたどると、岸田吟香、および福地桜痴という二人のジャーナリストに行きつく。松浦寿輝は、『明治の表象空間』第Ⅲ部 エクリチュールと近代、において、北村透谷、樋口一葉、幸田露伴、そして福地桜痴の4人の文体を並べている。4人目に福地桜痴をあげた点には、松浦寿輝の凄みを感じざるをえないわけだが、普遍性や永続性と切り離された「今・ここ」を軸に紡ぎ出される言説、これを生み出したとして福地桜痴に与えられた栄誉は、福地ではなく岸田吟香に与えられなくてはならないだろう。なぜならば、西南戦争に従軍し、「今・ここ」を叙述する言説を生み出した福地だが、それは、台湾出兵において岸田吟香が行った言説生産を下敷きにしたのであり、むしろ、東京日日新聞主筆として福地が筆を振っていた時に、経営者として福地を操っていたのは岸田吟香であり、福地の戦地記事の掲載や取材方針については、岸田吟香の意向が強く反映されていたことは想像に難くないからである。

戦場という取材現場において、岸田吟香がどのように事実の叙述をおこなったか、彼の台湾出兵従軍記事を分析していこう。明治7年4月13日か

ら断続的に掲載されることになる「臺灣信報」は、岸田吟香による台湾出兵の従軍記事である。日本史上初の従軍記事とされる。

まずは、「臺灣信報」第1号が掲載された「東京日日新聞」明治7年4月13日(659号)をもとに基本的な紙面構成を確認しておこう。縦書き、右上から「官許東京日々新聞」とタイトル、その下に、号数と日付。1枚表裏2ページの構成で、表ページには、順に「公聞」という正院からの官報、次に「江湖叢談」という情勢記事、「臺灣信報第壹號」、「物価日表」として大豆小豆、ごま、塩などの値段記載が掲載されている。裏ページに移ると、上中段に「投書」、中段の末から「報告」、下段に各種広告、末尾に、「浅草瓦町十六蕃地 本局 日報社 編集人 甫喜山景雄 印刷者 條野傳平」と奥付記載がある。広告には、「横濱岸田氏製 眼病即愈精錡水」という岸田吟香製の目薬も含まれる。江湖叢談は、現在言うニュース記事であるが、この日は、冒頭に、「佐賀城中ノ遺文写」として佐賀の乱において、島義勇が残したという檄文が全文そのまま掲載されていたり、深川三十三間堂の徳川家康像を富岡八幡宮に遷座する記事や、東京蓬莱社の丁稚による社中金二百円の持ち去り顛末の事件記事などが掲載されている。おそらくは、当時の足で集められる情報をかき集めて文章化したものである。

「臺灣信報」第1号は、岸田吟香が汽船ヨークシャー号に乗って品川を出発し台湾に向かうことが述べられている。「臺灣ノ地生蕃ノ境ハ風教ノ行ハレザル地」であるから、「必ズ數件ノ異聞奇事アルハ論ヲ俟ザル」から現地へ赴いて、「風俗事情ハ元ヨリ苟モ見聞ノ及ブ所盡ク搜索探討シテ号ヲ逐テ信報スベシ」と決意が示される、わずか四百字ばかりの記事である。「第壹號」とあるとおり、この日から連載するとの宣言であり、明治初年の新聞としては、連載の宣言は稀少な例である。いわば「臺灣信報」第1号は新聞記者としての単なる決意の表明であって、なんら新しい事実を伝えるものではない。今後、この従軍記事が無事、滞りなく掲載される保証もない。事実、台湾出兵をめぐる国際情勢の影響等で、台湾に兵士を送る汽船の手配で国際的協力が得られず、長崎で派遣軍および岸田が長く足止めにあったり、現地で病を得た岸田吟香が一旦、帰国することになったりと、掲載中止の危機にも何度となく遭遇している。この先の見えない連載記事をなぜ、岸田吟香はスター

トさせることにしたのか。台湾出兵への従軍をめぐる事情について岸田吟香は、後日、「東京日日新聞縁起」の中で、次のように述べている。

余社中に説いて記者を従軍せしめんことを勸む、然るに社中みな云はく、豈操觚の士にして海外の戦陣に従ふの理あらんやと、皆その危険を恐るゝ者の如し、且社中の多くは、新聞を見て遊玩の具と成し、自から重きを置かざるに似たり、余云く、新聞は國家の耳目なり、事の細大に拘はらず見聞する所あれば即ち録し速かに海内同胞に報知するを以て責任とす、今や臺灣征討の如き事、最も重大に屬し上下臣民一般の深く憂慮する所なり、殊に其戦闘の景況は極めて全国同胞の一日も速かに聞知せんことを欲する所なるべし、故に西洋各國の新聞社に在りては凡そ戦争ある毎に必らず新聞採訪者を派出して従軍せしむるを例とす、請ふ勇往にして文筆ある者を選んで速かに此役に従はしむべしと、衆みな推諉して一人の従軍を願ふ者なし⁴⁾ (傍線山田、以下同じ)

「東京日日新聞縁起」は、明治 31 年 6 月 15 日の同紙面に掲載されたものであるから、台湾出兵の四半世紀近くあとの回顧談となる。その間、西南戦争において福地桜痴の「戦報採録」記事が好評をえて、東京日日新聞が大きく発行部数を伸ばし、また日清戦争を経て、戦争におけるジャーナリズムの存在が確実に必要とされるようになったから、この回顧談に、「それみたことか」という自らの先見の明を誇る岸田吟香の気概が溢れ出ていることに議論の余地はない。後日談たることを前提としてなお、いくつか我々が着目しなくてはならない点があるだろう。まずは、「豈操觚の士にして海外の戦陣に従ふの理あらんや」というジャーナリストの位置をめぐる明治 7 年当時の一般認識について、である。「操觚の士」とは、文筆を生業とする者、つまり今で言うところの文士のことを指す。岸田吟香は、台湾出兵において暗躍したと想定される清国廈門駐在アメリカ領事の Charles W. LeGendre から使喚されたのだと想定されるが、新聞における従軍記者の存在を知り、「歴史の現場」に立ち会うべく、記者派遣を社内に提案したが、社内では、文筆の士が戦場に行くなどということは聞いたことがなく、その職務にあらず、

との反対をうけたのである。「操觚の士」は、各地から集められた情報を集積し、書齋において情報を精査して文章にまとめるのが仕事であって、外に出向いて自ら情報を収集するなどということはありません、と一般に考えられていたわけである。現在のジャーナリスト観からみると奇異にも響くが、前近代において主君に扈從した右筆の伝統に照らすと、たしかに明治7年には、現場に出向かないのがジャーナリストの本義とされていたのであろう。

この書齋派と現場派の差異が明確に現れ、最終的に新聞報道において現場派が勝利を収めることになるのは、西南戦争の記事をめぐることである。岸田吟香のあとを受けて東京日日新聞の主筆となった福地桜痴は、西南戦争の勃発に際して即座に九州入りをし、政府軍に従軍して、「戦地採録」記事を現地から送り続けた。他方、「東京日日新聞」と並ぶ部数を誇った「朝野新聞」の成島柳北は、「操觚の士」であることを貫き、戦地には出向かず、京都に拠点をおいて、九州から送られてくる情報を整理して文章起草した。結果、ライバル「東京日日新聞」が大きく発行部数を伸ばす反面、「朝野新聞」は、「熊本城落城」との数度の誤報、リアリティに欠ける描写により、その発行部数が明治10年から明治12年までで半数以下に落ち込むことになった⁵⁾。まさしく、岸田吟香が述べたとおり、「戦鬪の景況は極めて全国同胞の一日も速かに聞知せんことを欲する所」だったことが証明されたのである。

また、戦争経緯の日々の掲載が、国民の関心を最大限にひきつけ、新聞発行部数を増やすのに不可欠であることを岸田吟香は認識していたことも重要な点である。先に述べた昭和12年の日華事変報道でも明らかなおおり、人間は戦争の推移を知りたいという欲望に対して無抵抗である。ましてや、スポーツ観戦同様、争いごとの勝敗がどちらにころがるかわからない、という状態に人間は無防備に熱狂する。ワールドカップサッカーの自国チームの試合を、友人や家族と集まって生中継で視聴する国民の熱狂は、そのままリアルタイムで描写される戦争描写への熱狂と根本的には同じである。〈今・ここ〉⁶⁾の描写=情報、という近代ジャーナリズムの原則が日本において確立されたのは、このときであったと結論しても言い過ぎではないであろう⁷⁾。

では、なぜ、岸田吟香は、従軍することを期待したのか。社内ですれども手を挙げなかったのに、誰も挙げず、みずから従軍することを決めたのはなぜ

か。歴史の臨在即時について論じておきたい。次にあげるのは、「臺灣信報」第4号（5月10日付、684号）の記事である。

四月廿九日長崎發

臺灣行ノ蒸氣船北海丸ハ本月廿日十一時二品川沖ヨリ出帆シ同日ハ伊豆ノ沖ニテ夜ニ入り廿一日ハ遙ニ遠州洋ノ南ニ向テ針路ヲ取り四國ノ外ヲ廻リテ長崎港ニ入ラント志シタルニ其日午後ヨリ風烈シク廿二日ニ至リ追々烈風高浪ト成リテ船ノ蕩搖スルコト箕ノ如シ…（中略）… 此際ニ當リ最モ憐ムベキハ此度新タニ雇入レタル水夫ニ品川洲崎ノ茂助ト云フ壯年ノ男アリシガ帆檣ノ下ニテ水樽ニ腰掛ケテ仕事ヲシテ在リシガ大浪ノ來ルニ乗ジテ船忽然トアヨリタルニ水樽ノ覆ルハヅミニ彼ノ茂助ヲ海中ニ打落シタリ此時船上ニ居合ワセタル者ヨリ急キ空樽ヲ投込ミタレドモ既ニ四五間モ隔タリタレバ手ヲ掛ケ得ザリシ様子ニテ逆卷ク浪ノ間ヨリ三度マデ手ヲ上ゲタル由早ク船ヲ止メヨ^{マシーナ}機關ヲ休メヨト甲板上ヨリ聲ヲ揚ゲテ呼ビ立テタレドモ船中ハ浪ニ操レテ物音烈シカリケレバ機關方ヘ耳ニ入ラザリシニヤ急ニ船ヲ止メズ且ツ帆モ上ゲテ有リシヲ以テ船ハ遙ニ其場ヲ去リタル頃漸ク船ヲ跡ノ方ニ廻シテ其當リヲ捜ガセドモ其影サヘモ見當ラサリシトゾ此男ハ妻子モアリト聞ケバ其歎キ如何計リナラント思ヒヤラレテ憐レナリ⁸⁾

品川を出港した汽船北海丸が遠州灘を抜けて四国南方を経て長崎へ向かう途中で起きた、一人の水夫の転落事故を叙述した記事である。この叙述は、現在のように新聞文体が定まっていない当時の新聞記事としても異例の描写がなされた文体であると言える。まずその特異な点の第一は、詳細な時間経過が付されているということ。5月10日の紙面に掲載されているが、岸田吟香が4月29日に長崎から送った記事であることが冒頭に記され、事件の内容が4月20日から22日にかけてのことであることが述べられている。日付が付されていること自体は、当時の新聞においても特段珍しいことではない。しかし、「十一時二品川沖ヨリ出帆シ」と時間が示されているのは極めて異例の表示である。出港後、時間を追って天候が悪化する前提、そして、

いよいよ水夫茂助の転落事故の顛末と、描写の時間経過はより焦点化され、茂助が大浪にさらわれたこと、茂助を助けるべく空樽が海に投下されたこと、茂助の手が空樽に届かないこと、水波の音で船上の声が届かず機関停止まで時間がかかったこと、船が引き返したこと、転落地点を捜索したけれども茂助の姿を見つけられなかったこと、と、おそらく十数分間におきたことが時間順に述べられていて、リアリズム文体の萌芽が兆していると評価してよいだろう。時間経過に加えて、空樽を投げ込んだ時の船と転落した茂助の距離が四五間（7～9 m）と、リアルな空間報告までなされている。この後も、「臺灣信報」の時間描写は同様で、「五月十七日十二時蒸気タカサゴ丸長崎ヲ出帆」「五月廿二日朝七時臺灣島南部の西岸ナル「車城」ノ「琅琦」湾ニ着セリ」、「我が斥候ヲ發シ車城ヨリ東方ノ山間道程三里バカリ進ミ入りタルニ」⁹⁾など、時間空間を数字を用いて具体的に記録している。

まさに、出来事の描写のためにそれを実現するための文体としてリアリズム文体が用いられていることは重要であるが、そもそも、岸田吟香は、なぜ茂助転落の顛末を記事におこしたのであろうか。台湾出兵に同行した岸田吟香からは、東京の日報社に対し、記事にすべき公的な通信と私的な通信とが送られており、台湾にわたってからは、岸田吟香の手紙が船の都合により時間が前後して東京につくことがあり、また、場合によっては、私的な通信だけでもと言いながら紙面に掲載したりしており¹⁰⁾、茂助転落顛末も私的な通信であった可能性はゼロではない。台湾出発まであまりに出来事がなかったために、紙面を埋めるべき事件として採用せざるを得なかったという可能性もゼロではない。しかし、高砂丸の長崎までの経路の叙述ということを考えれば、岸田吟香が茂助転落顛末を台湾出兵のひとつの出来事として、報ずべき事件であると判断したことは、明治の代表的ジャーナリストの判断として検討する必要のある事実である。

むろん、茂助転落顛末は歴史的事件ではない。そもそも茂助は、その姓すらわからず、彼の行方不明ののち、彼の妻子がどうなったかの記録も公的にはないだろう。日本史において台湾出兵は、歴史的事件として登場するけれども、台湾出兵の記録において茂助のエピソードが語られることはない。では、なぜ、岸田吟香は、茂助転落顛末を書き残したのであろうか。目の前で

起きた死亡事故の重要性を感じたからか。いや、それは、岸田吟香が自らの行動を《歴史》的行動と判断していたからにほかならない。台湾出兵の閣議決定を漏れ聞いた瞬間から、大倉喜八郎の従士として、台湾出兵に同行することを決意したときから、岸田吟香は、自分が歴史の現場に立っているのだ、という強い意識と、国民に戦争の経過をつぶさに伝えるのだという使命感を抱いている。つまり、台湾へと向かう北海丸は《歴史》を体現する汽船であり、従軍する「私」は歴史を体験する存在として、その耳目で得たものはすべて歴史として書き残すべきである、という強烈な史家意識が芽生えたのである。だからこそ、北海丸が11時に出航したという細かな時間さえも客観的な歴史事実として意味を持つ——と岸田吟香は考えた——のである。爾来、近代ジャーナリズムを席卷する史家意識は、現在でもよく目にするところのものだといえよう。東京オリンピックで選手某の競技を「13歳真夏の冒険」とアナウンスしては、「歴史の瞬間に立ち会った」などといった言辞を弄するのは、このたぐいである。

「今・ここ」を体現する近代ジャーナリズムと起業家精神

松浦寿輝は『明治の表象空間』第Ⅲ部において、福地桜痴の西南戦争の従軍記事を評して、出来事の即時即応の叙述報道について議論している。松浦は、福地の文体を分析して、福地が「絶えず言説主体としての自身の「今・ここ」を強調し、速報性の価値を謳い、迫真的な臨場感の昂揚を情緒的に増幅」¹¹⁾しているという。そして、「短い文を畳み掛けるようにして事実を完結に記述してゆくこの文体の清潔な現代性は、画期的」¹²⁾であると評価する。また、この文体によって新聞紙上で、「情報共有することによって醸成される共同性は、「国民」主体の形成に資するもの」¹³⁾なのだという。むろん、松浦の言説の底流には、現在の「情報」の軽薄さに対する批判と、単純に醸成される軽薄な「国民」意識に対する嫌悪感が潜んでいる。それは、福地の文体の革新性は認めつつも福地の言説の薄っぺらさ、いやむしろ空虚さへの批判となって、次のように述べられている。

…しかし、福地桜痴の「今」はこうした相対主義とも複眼的思考とも無縁である。

福地が言語化しようとした「今・ここ」は単なる「今・ここ」以外の何ものでもない。そして、深さも広がりも欠いたその単なる「今・ここ」の表層性に、福地の言説の「現代」的意義があり、また同時代人たちにとってのその魅力もあった。『文明論之概略』における「今」の相対性への注意喚起は、射程の長い思考をなしうる知識人の備えた認識論的遠近法によって要請された身振りだが、「戦報採録」における福地の「報道」の言説は、その遠近法を見事なまでに欠落させており、「今」は「今」、「ここ」は「ここ」でしかない。歴史的・地理的接続を断たれたこの単なる「今・ここ」の、同時性と臨場感の快楽に読者を目覚めさせたことが、あえて言えば彼の言説に孕まれた歴史性そのものであろう¹⁴⁾。(傍点原著ママ、以下同じ)

福地の言説の「今・ここ」性の奥に、現在の情報社会の軽薄さを松浦は見ているのだが、福地の意識的ではない、無意識的な副産物としての「歴史性」はたしかに福地の西南戦争「戦報採録」には適合するかもしれない。しかし、福地に先立つ元祖「今・ここ」報道の主体たる岸田吟香の場合は、そう簡単には済ますことはできない。なぜならば、岸田吟香の「臺灣信報」に浮かぶ思考には、福沢諭吉にも通じる、「懐の深い相対主義」や「複眼的なプラグマティズム」¹⁵⁾が根付いているからである。

松浦寿輝は、戦争報道から、「今・ここ」を強調する叙述が生れたとしているが、岸田吟香の報道は、「今・ここ」の報道というのとはかならずしも一致しない。たしかに、台湾出兵においての戦闘記録、「風港口進撃始末」「石門口進撃始末」、「竹社口進撃始末」¹⁶⁾、などは、福地桜痴の「戦報採録」を原初的にしたかのごとき叙述で記録されている。だが、岸田吟香は、公文として戦闘記録を書き送りながら、同時に、長崎や台湾で見聞したものの、現状から推論されるものについてつぶさに書き送っている。たとえば、「臺灣信報」第8号では、長崎で足止めされている兵士たちの様子を述べているが、佐賀の乱に従軍した兵士が戦場の血風を引きずって多くが殺気立っているも

のの、一人として暴れたり酒に酔って喧嘩をしたりするものなく、長崎市中においても、風紀の乱れがないことを嘆賞している¹⁷⁾。次いで、「臺灣信報」第9号には、長崎の現状の衰退状況を愁い（「生意冷淡澹衰微極マレリ」）、貿易港としての再建案を提言する。^{アントレプレナーシップ}起業家精神に富んだ岸田吟香の面目躍如というべき内容で、①背後に高島炭田、唐津炭田、三池炭田など良質の石炭を産すること、②天然の良港であること、③九州地方の煙草は品質が高く主力産品となりうること、④近来、筑後肥後に製茶養蚕事業が勃興していること（八女地方）、⑤台湾を領有すれば、地勢的に長崎港が玄関口になること、これらを前提とした産業振興をはかるべき、と提案している。以後の長崎の発展を見れば、岸田吟香の提言が的確であることに驚きを禁じえない。

帝国主義的視線

また、岸田吟香の叙述を論じる際に指摘をしておかなくてはならないのが、その帝国主義的性格である。岸田吟香は、イラストにも長じており、新聞のビジュアル提供においてもその先駆をなしているのだが、「臺灣信報」第7号では、紙面を二段抜きにして、台湾全図を掲載している。以後、どこで戦闘が行われているかが、地図を見てあきらかであるが、同時に、清の支配が及んでいる地域、つまり、文化が及んでいる地域と、蕃地、つまりいまだ文化が及んでいない未開の地との境界を線引してあって、大日本帝国が征服すべき版図がどこであるのかを、国民に対し明瞭に示している。地図とあわせて執筆された記事は、台湾島の概要が示され、末尾には、「岸田吟香誌」と署名が入れられている。

…夫レヨリ東ノ海岸ハ皆土蕃ノ巢窟ナリ此邊二十八ノ部落アリテ各々酋長アリ其内半ハ牡丹人種ト名ヅク性猛惡ニシテ人類ニ似ズ好ンデ鬪争ヲ成シ負ケタル者ノ肉ヲ屠リテ喰フ去年琉球人ノ殺サレシモ此處ナリ…（中略）…古來未ダ其地ニ至リシ人無キヲ以テ人種物産未ダ詳ナラズト雖ドモ大抵蝦夷人ニ同ジカルベシ¹⁸⁾

台湾原住民を人肉食の野蛮人だとして描写しており、未開の地であるから、「是ヲ開拓シ大木ヲ伐リ荊棘ヲ焼キ土蕃ヲ教ヘ導キテ以テ我ガ皇國ノ版圖ヲ廣メント爲シ玉フノ思シ召シナルベシ」¹⁹⁾と記事はしめられている。

地図だけではない。「車城」に蒸気船が停泊する港の風景（第13号）、台湾に生えている棕櫚に似た樹木のイラスト（第14号）、また、6月26日（第17号）で報じた現地の十二、三歳の少女については、その外見をつぶさに記し、第20号には、同少女の顔をイラストにして掲載している。現地人の風俗（「臺灣手藁」）、商船の図、竹のボートの図（竹桴の圖）など、文字、イラスト、地図などを用いて、多角的に台湾の姿を浮かび上がらせようと苦心していることがうかがわれる。

特に、現地少女に対する姿勢は、帝国主義的視線の典型となっているといつてよいだろう。ロビンソン・クルーソーの、現地少年フライデーに対する関心とほぼ同種のものが、少女に対して寄せられていると言ってよい。資本主義と帝国主義とを体現する存在として、岸田吟香の叙述はその時代的制約を逃れうるものではないが、これについては後日論じることとして、ここでは深くは触れない。

無理にまとめると、「臺灣信報」の特徴として以下のことが言えるであろう。

（1）台湾という日本人にとって未知の外部世界、南方世界に対する想像力に答える叙述であり、同時に帝国主義的欲望の端緒となったこと。

（2）文明人であるという自己認識に裏付けられて、文明人／未開人という二項対立で他者認識を行う端緒となったこと。

（3）資本主義下のアントレプレナー的視点から社会を認識する先駆であること。

（4）地図やイラストを用いて、ビジュアル描写を積極的に導入したこと。

（5）臨在即時の歴史叙述。

臨在即時の歴史叙述

最後の（5）について、もう少し議論を展開しておきたい。先に私は、松

浦寿輝がいう〈今・ここ〉という以上のものが岸田吟香の叙述にはある、と述べた。それは、岸田吟香が、自らの行動を《歴史》的行動と判断していることに因っている。岸田吟香は、台湾出兵を歴史的出来事、歴史的事実と判断して、それに対し、自ら「國家の耳目」となって、「事の細大に拘はらず見聞する所あれば即ち録し速かに海内同胞に報知する」責任を感じている。つまりは、そこに「歴史」という存在があることを前提として、描写を行うのである。いわば、神の臨在性ならぬ、歴史の臨在性を岸田吟香は実感しており、どんなことでも記録するのである。臨在即時の歴史叙述²⁰⁾が、岸田吟香の文章の最大の特質なのである。岸田吟香はいかにして歴史の臨在性を得たのか。岸田吟香がそこに歴史が在ると信じたから、である²¹⁾。信じたからこそ、歴史を記述する自分の文章を《事実》の記録として世に発信するにあたり、いささかのためらいも感じなかったわけである。

岸田吟香の事実への欲望は、江藤淳が「リアリズムの源流」の中で論じた、正岡子規と高浜虚子のリアリズムをめぐる認識の対立を容易に想起させる。子規が奉じたのは、科学的客観性にかぎりなく近いリアリズムによって、過去からの持続を断ち切る「写生」の可能性である一方、虚子がよって立ったのは、俳句が言葉の芸術である以上、決して過去からの連想を完全に脱却することはできない、という認識であった。子規がいくら、リアリズムに立脚する理想の表現を標榜しても、言葉によって表現する以上、言語が持つ歴史的記憶から自由になれないこと、時として、言語を紡ぎ出す主体さえも、書かれた言語に従属せざるを得ないこと、これが虚子の示す、リアリズムの現実であった。これは、同じく、《事実》の忠実な書き手たらんとした、岸田吟香にもあてはまる。要は、正岡子規と岸田吟香は、革新的な文体観の持ち主として共通するのだが、岸田吟香が、いかに自分のあるところに《歴史》が在るのだと信じたところで、あらゆる現実の中で何を選び出して言葉を与えるか、そこでは対象の選択が行われ、また一人称による表現は当然のこと一人称の表現であるし、あたかも三人称による客観的描写を標榜したところで、その三人称は、実は「私は」を「岸田吟香は」と代換しただけの、実質は一人称の記述から逃れることはない。アーサー・ダントのいう「理想的年代記作者」にはなりえないのだ。しかし、実質一人称の叙述を三人称の叙述

と誤認することによって、いわゆる《事実》の優位性へのあやまった、客観性思考が生まれるわけである。

なにも岸田吟香の明治の慣行ではない。Factfulness、データサイエンス、現在の流行は、その実際は、一人称によるナラティブと根源的に変わるものではなく、それら自体が、ひとつのナラティブなのである。

最後に、《事実》をめぐる議論にもどっておきたい。松浦寿輝は、現在のメディア空間について次のような言葉を記している。

…メディア空間の「今・ここ」は日々更新され、古いものは絶えず読み捨てられてゆくので、瞬間的に肥大した言説のリアリティは、いかなる普遍性をもとわぬまま同様に瞬間的に雲散霧消し、新たに出現した言説のリアリティがそれにとって代わり、それが次々に繰り返されてゆく。その場合、読者の意識にとって、昨日の「今・ここ」と今日の「今・ここ」はしばしば心理的に不連続で、その間の論理的・因果的連関は綿密に検証されることがない。

メディア空間を飛び交う言説の帯びるこのようなリアリティを、或る特異な信憑性¹⁾と言い換えてもよい。人は、それを知るといふよりむしろそれを信じるのだ。ただし、それを真であり正であると信じるのではない。その真偽、その正誤を宙に吊ったまま、ただその言説が実在²⁾することだけを信じるのであり、翻ってその信がまた言説をさらにいっそう強固に実在させることにもなる。

奇妙な信憑性ではある。この信は徹底して空虚なものだ²²⁾。

松浦は、ここで、メディア空間において「情報」として（いまや）無数に提供される言説を、人は知るのではなく、無防備に信じてしまって、信じるがゆえに実在することを事実として受け入れてしまっているのだと、現代社会を批判している。「馬」の定義を述べなさい、と尋ねられて、辞書にある「馬の定義」を回答して、馬についてわかった気になるというトートロジーの変形がまさしくこれにあたる。馬の属性を辞書で調べたところで、馬について理解したことにはならないわけだが、現代社会はやはり、無数の Thomas

Gradgrind を生み出してしまっているのである。

上記松浦の主張に、私は、かの Thomas Gradgrind の名「Thomas」のもととなった、使徒 Thomas のエピソードを想起する。使徒トマスは、イエスの 12 人の弟子の一人でディディモと呼ばれていた。イエスが復活して弟子の前に姿を表した時、トマスは彼らと一緒にいなかった。他の弟子たちにイエスの復活を告げられたトマスは、主の復活を信じず言う。「あの方の手に釘の跡を見、この指を釘跡に入れてみなければ、また、この手をそのわき腹に入れてみなければ、わたしは決して信じない」と。そんなトマスの前に復活したイエスが現れ、トマスに告げる。「あなたの指をここに当てて、わたしの手を見なさい。また、あなたの手を伸ばし、わたしのわき腹に入れなさい。信じない者ではなく、信じる者になりなさい。」と。ようやくイエスの復活を信じたトマスに対して、イエスは、「わたしを見たから信じたのか。見ないのに信じる人は、幸いである」²³⁾ と最後に告げる。

ここでの使徒 Thomas の発言は、先に述べた、ヴァレリーが言う「泡沫」と同じことなのではないだろうか。イエスの復活を信じなかった使徒 Thomas にとって、イエスが十字架の上で手に釘を打たれ、わき腹を槍でつかれて絶命したことは、《事実》である。絶命したはずのイエスであれば、手とわき腹に傷跡がのこっているはずであり、傷跡によって、死んだはずのイエスと復活したイエスが同一人物であると同定できるはずだと、Thomas は考えたのである。傷跡からイエスの復活を《事実》として認定する使徒 Thomas は、《事実》以外を信じようとはしない。Thomas による《Facts》の特権化は、まさしく、現在社会において情報が事実であるかどうかを確認するプロセスと同じである。すなわち、事実が事実であることを確認することに血道をあげて、事実を確認したことをもって満足するのだ。

しかし、事実が確認できたからといって何だというのであろうか。イエスの傷は、イエスの復活という「海」に比べれば単なる「泡沫」にすぎず、結局、使徒 Thomas は、復活したイエスのわき腹に傷跡が残っていることを確認したのみであって、イエスの復活の意味を問うこともなければ、信仰とつなげて考えることもしない。イエスがいう「見ないのに信じる人」とは、事実が真実であるかどうか検証せずに信じる人、という意味ではないだろう。

おそらく、事実であるかどうかにはフェティシズムを感じ、「海」を見ようとせず、ただ「泡沫」のみを無限に追い求めその人生を終える人ではなく、「泡沫」の全体をなす「海」あるいは、「海」に隣接する「空」を信じる人を指す。教皇ベネディクト十六世は66回目の一般謁見演説で、使徒 Thomas を語り、トマス・アキナスの解説を引用している。「見ているのに信じない者よりも、見ないで信じる者のほうがはるかに価値がある」²⁴⁾。まさしく現代社会の《事実》に対する正しい解釈がここにある。

註

- 1) 拙稿「〈脱周縁化〉する記憶——「ひめゆりの塔」の表象——」（2010年）で詳細に分析した。
- 2) 河上徹太郎全集第1巻、『有愁日記』、p.14
- 3) 同上
- 4) 「東京日日新聞」明治31年6月15日
- 5) 前田愛「成島柳北」には「柳北は、新聞の本来の使命が、迅速で正確な報道にあることをついに理解できなかった人であった。柳北の好敵手であった福地桜痴が、政府高官との醜聞を云々されたにもかかわらず、この点でははるかに近代的なジャーナリストとしての資格をそなえていたのと対照的である」と評されている。「ジャーナリスト」という観点からの判定となると、たしかに前田の指摘するとおりでである。（『前田愛著作集1』p.458）
- 6) 松浦寿輝『明治の表象空間』（新潮社、2014）、p.604
- 7) 操觚の士と近代ジャーナリズムの対立については数々の証左があつて枚挙にいとまがない。一例をあげれば、篠田仙果『鹿児島戦争記』（松本常彦校注、岩波文庫）は、操觚の士による代表作である。同書に収録された松本常彦の解説にあるとおり、『鹿児島戦争記』は、西南戦争についての戦争読み物の一つであり、新聞記事を編集したものである。新聞記事を生記事として、それを編集して一個の物語を作り上げるというのが、操觚の士の仕事であつて、それ以上でもそれ以下でもない、という当時の一般認識をよく示している。

- 8) 「東京日日新聞」明治7年5月10日(684号)
- 9) 「東京日日新聞」明治7年6月10日(712号)
- 10) 「東京日日新聞」明治7年6月25日(725号)掲載の「臺灣信報」第16号冒頭に次のような記載がある。「本館發臺灣探訪人岸田吟香六月八日臺灣車城發ノ書狀本月廿三日下午到着セリ書狀中ニ公文私文アリ其公文ハ諸口擊進始末上申三通蕃地土人上申一通ナリ其ノ私文ハ吟香本館ニ寄スルノ書ナリ亦タ以テ風土人情ヲ察スルニ庶幾ンカ先ヅ其公文ヲ左方ニ掲グ」
- 11) 松浦前掲書、p.614
- 12) 同上
- 13) 同上
- 14) 松浦前掲書、p.618
- 15) 同上
- 16) 「臺灣信報」第16号、17号、18号、「東京日日新聞」明治7年6月25日(725号)、6月26日(726号)、6月27日(727号))
- 17) 「臺灣信報」第8号、「東京日日新聞」明治7年5月16日(689号)
- 18) 「臺灣信報」第7号、「東京日日新聞」明治7年5月15日(688号)
- 19) 同上
- 20) 岸田吟香や福地桜痴の文章を読む時、私が想起するのは、沿岸漁業の漁船が、水揚げした大量の鯛を船内の冷凍庫に瞬間冷凍する情景である。
- 21) この開き直った無根拠について、私が想起するのは、『モーセと一神教』におけるフロイトの姿勢である。モーセをエジプト人であったと仮説を立てたときのフロイトの論証過程にたしかなものはない。そこにあるのは、そう信じる、という論理を超えたある種の信仰であり、岸田吟香が歴史の臨在性を信じるのは同様の心的作用であると私は考えている。
- 22) 松浦前掲書、pp.628-9
- 23) 新約聖書ヨハネによる福音書 20.24-298 (新共同訳、日本聖書協会)
- 24) (『ヨハネ福音書注解』: *Lectura super Evangelium sancti Johannis 20, lectio VI, § 2566*)、カトリック中央協議会「教皇ベネディクト十六世の66回目の一般謁見演説 使徒トマス」<https://www.cbcj.catholic>.

jp/2006/09/27/3060/ (最終閲覧：2021年11月8日)

歴史の
臨在性
について

二
四